農業土木を支えてきた人々

野井倉甚兵衛

―― 大隅半島シラス台地の開田 ――

福田　南兵衛*

I. はじめに

九州の東南端に，鹿児島湾を距てて，薩摩半島と相対する大隅半島，北は野生馬で知られる都井岬，南は東大ロケット基地のある内之浦の岬に抱かれた志布志湾は，いまは大型の開発でゆれている。湾の内陸は，西を高隈山脈に限られ，東は鹿屋笠之原より志布志まで続く火山噴出物の台地で，通称シラス台地と呼ばれ，特殊土壌地帯として，生産性が低いこともよく知られている。

台地を開析して，東から安楽・菱田・田原・肝付の諸川が，沿岸にわずかの沖積面を残して志布志湾に入る。

この菱田川の下流両岸に，西（右岸）に蓬原開田 450 ha，東（左岸）に野井倉開田 520 ha が完成されている。ここで述べようとするのは，この開田を完成させた一老農の献身的な生涯の一端である。

薩摩藩は，藩政時代農民に対し，門割制度という他藩に例のない農民統制政策をとった。野井倉地域の検地名寄帳をみると，水田はわずかに菱田川沿岸の沖積面が，藩庫による大久保井手，上之津留井手によって，80 ha 余が利用されていたにすぎなかった（鹿児島県維新前土木史・日向地誌）。モミ1石に米3斗9升8合という重い年貢に苦しんだ農民は，台地面の畑に，カンショ・アワ・ソバ・ダイズなどの雑穀をつくって，食いつないできたが，この台地面の水田化という農民たちの悲願は，維新前までは実現されなかった。

志布志郷野井倉村は，50余の門・屋敷があったが，野井倉甚兵衛は，野井倉門の名頭，仁助の長男として，明治5年1月1日に生まれた。

12歳で家を継いだ彼は，年々襲来する台風や豪雨，太平洋高気圧の居すわりによる干バツで，収穫皆無となる畑作の被害を直視して，〔なんとかしてこの台地に水を〕という執念をもやしはじめた。

II. 蓬原開田

明治24年12月，菱田川右岸の蓬原・菱田原への導水願が，時の鹿児島県知事山内提雲に提出された。出願したのは，宮崎県都城の人限元宗正と，熊本県佐敷村の人川村競の両名である。限元はもと都城島津藩士棟寛の子，若冠21歳で北海道に渡り，岩内郡発足村で独力で開墾事業を起した。川村は佐敷村の豪農で，当時乳牛と茶園を大規模に経営していた。両人の共同出資により，工事に着手したのは，明治25年6月のことであった。

当時野井倉甚兵衛は，ようやく20歳を迎えたばかりであったが，蓬原で始めたときいて，野井倉原への導水を計画して，たびたび地区農民との会合，協議を重ねた。

明治25年7月9日の日記につぎの記録がある。

〔鶏3羽36銭，米6升48銭，しょうちゅう9升72銭，その他計2円79銭，うち2円は肴代として限元どんより寄付，残79銭割出し〕

これは，彼が開田に関して記録している最初のものである。すでに限元宗正らと接触を続け，蓬原完成後は野井倉原の着工を目ざして，測量に着手していたのであった。

総工費1万2千円で着工した限元・川村らの計画は，測量の誤りから完全に失敗した。〔コウ配を知るために，孟宗竹を二つ割にして水を流した〕と，古老の談のとおりであったとすれば，無理もないことであった。

資金に窮して自決まで考えた両人に対し，その苦ちゅうを察して新たに資金主をあっせんしたのは，前田正名であった。興業意見30巻などで知られる前田については，ここで詳述する必要はない。彼の尽力によって，京都の資本家大沢善助が，蓬原開田事業に投資，協力することとなった。限元・川村らを日向発起人，大沢を京都発起人と呼んでいる。

* 鹿児島県有明町文化財審議委員会（ふくだ　なんべえ）

写真-1 野井倉甚兵衛翁

明治28年12月，取入口を上流に移し，総工費9万円で再び着工，明治31年3月ついに待望の水が，蓬原の台地に注がれた。しかし，明治30年代の日本は，日露戦役をはさんで多難を極め，開田面積の拡大は遅々として進まなかった。この状況をみて，地元農民の総力を結集して耕地整理組合をつくり，この事業の完成をはかるため，その中核として登場したのが馬場藤吉であった。彼は30歳を越したばかりで，姉は野井倉甚兵衛に嫁していた。

甚兵衛が馬場の事業に協力したのは，兄弟の縁故というのみでなく，菱田川の東西両台地の開田完成という共通理念があった。前田正名が官をやめて，全国遊説のため志布志を訪れたとき，若い両人は親しく前田の指導と助言により，ますます決意を固くしていった。

明治45年3月，馬場はついに耕地整理組合設立，組合員578名によって組合長に選ばれ，事業の完成をはかることとなった。しかし，第一の難関は資金の調達であった。大沢より一切の権利を買収し，かつ新しく工事を実施するには，60万円を必要と見積もられた。甚兵衛日記をみると，鹿児島市1泊宿料45銭という時代である。

農工銀行からの借入交渉をくり返したが容易に成功せず，次々に計画を変更，大正5年に至りようやく9万6千5百円の借入れに成功し，翌大正6年6月，一たん完工して通水したが，翌日の豪雨によって決壊個所続出し，秋の収穫を終えて補修工事にかかり，大正7年4月ついに240 ha の開田を完了した。その後，十五銀行より18万円の融資を受け，開田面積の拡張，諸権利の買収を終えたが，馬場はついに大正11年7月，苦闘の生涯を48歳で閉じた。甚兵衛はこの間に，トンネル工事や頭首工工事の現場に泊込みを続け，工事の監督，資金の調達

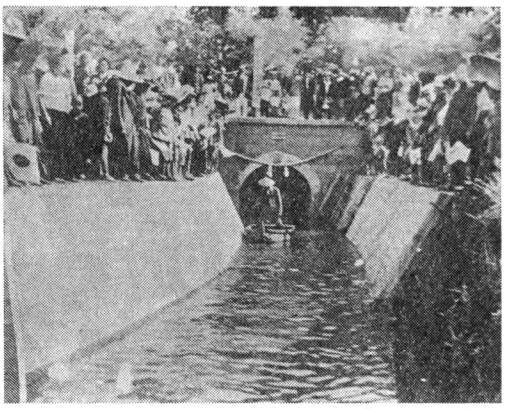

写真-2 野井倉開田通水式（昭和24年6月5日）

のため，馬場の手足のごとく東奔西走した。

蓬原開田の成功は，川一つへだてた野井倉の地区民を激励した。甚兵衛はいよいよ野井倉耕地整理組合の結成に同志とともに起ちあがった。

III. 野井倉開田

菱田川下流は，東西両岸に対称的な河岸段丘が，それぞれ三段に発達している。最も低い沖積面は古くより水田化し，上の二段丘面は，標高20～60 m で，そのカンガイには，遠く上流に水源を求めなくてはならない。

野井倉開田の水源は，本流をさかのぼって，牛ケ迫地点に設けられた。そのためカンガイ地まで13 km のトンネルを掘らなくてはならない。その中間には堅い中生層の岩石から成る岳（たけ）の山（やま）が横たわっていた。

組合が結成されたのは，昭和6年1月で，組合員654名により，はじめ組合長として志布志の岩崎宗茂助を選んだが，野井倉甚兵衛に引継がれたのは，昭和10年7月からである。

組合設立後の第一の問題は，資金の調達と，工事を誰にやらせるかという点であった。施工者については，はじめ前岩崎組合長のとき，大分県の樹村円治にやらせるとの意志表示がなされていた。しかし，県耕地課としては，当時日本水電（現九州電力）が，水路の途中で4,000 KW の発電を計画し，取入口から発電所までの一切の工事は日本水電がやるというので，すべての工事をそちらに任せたいとの指導がなされていた。

そのため甚兵衛組合長は，昭和11年初から13年6月まで，数十回にわたって県耕地課，日本水電，樹村氏との折衝をくり返した。バッチョ笠（竹の皮で張り，ひもで結んで，農作業などに冠る。甚兵衛は，自ら手製のものを使っていた）をかぶり，古びた自転車にまたがり，組合員の意志統一に，夜を日についでかけまわった。

そのうち，昭和13年12月，突然県刑事課から事務所に人が来て，関係書類を押収され，甚兵衛組合長ほか２名が，志布志警察署に留置され，のち鹿児島署に送られるという事件が起った。工事着工間近いとみて，各業者間の競争が激化し，それにからんだ嫌疑をうけたためである。無実を信じた彼は，留置中和紙を差入れてもらい，コヨリを丹念につくり，それで弁当袋を編みあげていた。白日の身で釈放されたのは大晦日の午後で，めでたく14年の元旦を迎えたのであった。

すでに昭和12年日華事変が勃発し，戦線は拡大の一途をたどり，国を挙げて軍国体制の強化をはかって，太平洋戦争への道を進めている時である。

野井倉開田工事の第一日が，農地開発営団によって，始められたのは，昭和17年１月26日であった。太平洋戦争緒戦の戦果に，国民が歓喜したころであるが，基幹労働力はすべて応召して戦地にあり，残るは婦女子と老人だけで，結局集団労働力としては，中等学校以上の学徒動員によらなくてはならなかった。郡内の青年学校はもちろん，県下各中等学校が相ついで野井倉に動員されて開墾に従事した。しかし，戦局は日を追って悪化し，昭和19年６月に至り，地区の主要団地 280 ha が突如海軍飛行場として設営されることになり，重大な計画変更を余儀なくされた。

終戦により事業は農林省直営事業として遂行され，ついに昭和24年６月，天皇の県下行幸に際してこの開墾をご覧になり，甚兵衛夫妻に親しくねぎらいのお言葉をたまわった。翌６月５日通水，バッチョ笠の甚兵衛が，巧みなさおさばきで小舟をあやつり，最終のトンネル口に現われたとき，半世紀悲願の達成に地区農民の歓びの声がわきあがったのであった。

昭和25年文化の日，南日本新聞社は，第一回南日本文化賞に野井倉甚兵衛を選んだ。

彼が開田一途の生涯を終えたのは，昭和35年３月４日，88歳であった。

〔1979. 8. 27. 受稿〕